Press Release

令和 8 年 7 月 22 日

妊娠がわかったときの気持ちと子どもの発達との関連：ネガティブな気持ちとの関連をソーシャルサポートが軽減！？子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）より

■ ポイント

東京科学大学リベラルアーツ研究教育院の永岑光恵教授（富山大学医学部公衆衛生学講座 協力研究員）、青森県立保健大学健康科学部 松村健太教授（富山大学医学部公衆衛生学講座 協力研究員）および富山大学医学部公衆衛生学講座 稲寺秀邦 名誉教授（富山大学エコチル調査富山ユニットセンター 研究員）のグループは、「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」に参加する 73,518 組の母児について、妊娠がわかったときのネガティブな気持ちが子どもの 3 歳時点での発達に関連するかを検討し、さらに、その関連に対するソーシャルサポートの媒介効果を調べました。その結果、妊娠時に「とてもうれしかった」以外の気持ちは、3 歳時の子どもの発達の遅れ疑いが多くなることと関連し、「特に何とも思わなかった」場合に最も強い関連が認められました。また、その関連はソーシャルサポートが媒介しており、周囲からの支えがその関連をやわらげる方向に働くことが示唆されました。

・この研究成果は、健康心理学系専門誌「Journal of Health Psychology」に 2026 年 6 月 28 日にオンライン先行掲載されました。

・https://doi.org/10.1177/13591053261460707

本研究は環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査に係る予算を使用し行いました。
論文に示した見解は著者自らのものであり、環境省の見解ではありません。
また、全ての著者において本研究発表に関する開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。

■ 研究の内容

妊娠は女性の生活を大きく変える主要な出来事であり、妊娠期から産後にかけては抑うつや不安などのメンタルヘルスの問題が高頻度で生じることが知られています。特に、望まないあるいは予期しない妊娠は強いストレス要因となり、母親の精神的健康だけでなく、母子関係や子どもの発達にも負の影響を及ぼす可能性が指摘されています[1),2)]。しかしながら、このような妊娠に対するネガティブな気持ちが子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかについては、十分に明らかになっていません。

一方、母親へのソーシャルサポート（「ちょっと詳しく」参照）は、母親自身のメンタルヘルスの改善だけでなく、子どもの発達を促進する保護因子としても機能することが示されています。しかし、妊娠に対する気持ちが子どもの発達にどのように影響し、その過程においてソーシャルサポートがどのような役割を果たすのかについては、十分に明らかになっていません。

そこで本研究では、日本国内15地域で実施されている子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）に参加した妊婦とその子ども73,518組を対象に、妊娠が判明した時点での気持ちと3歳時の子どもの発達指標との関連を明らかにするとともに、育児期（2歳半時点）の母親へのソーシャルサポートが媒介するかも併せて検討することを目的としました。

妊娠が判明した時点での気持ちは6つの選択肢（「とてもうれしかった」「予想外だったがうれしかった」「予想外でとまどった」「困った」「特に何とも思わなかった」「その他」）から回答してもらいました。また、子どもの発達は、保護者が回答する発達評価票「ASQ-3（Ages and Stages Questionnaires, Third Edition）」（「ちょっと詳しく」参照）を用いて3歳時点で評価しました。ASQ-3では、「コミュニケーション」「粗大運動」「微細運動」「問題解決」「個人・社会性」の5つの領域について評価し、各領域で基準値を下回った場合を「発達の遅れ疑い」と判定しました。さらに、育児期における母親へのソーシャルサポートについては、周囲からの愛情や精神的支援、人とのつながりに関する3項目を用いて評価し、妊娠時の気持ちと子どもの発達との関連に及ぼす影響を解析しました。なお、ソーシャルサポートは3項目の合計得点（3〜15点）を算出し、9点以下の場合にソーシャルサポートが低い状態と位置付けました。

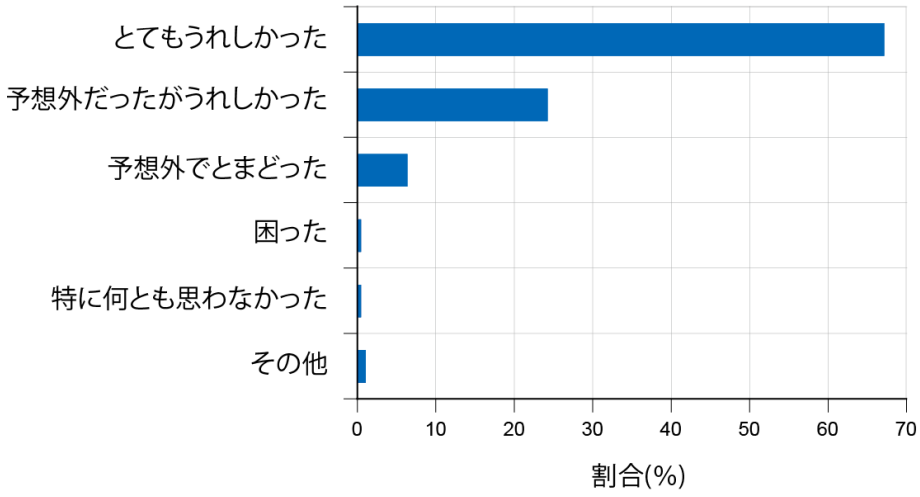

図１　妊娠判明時の母親の気持ちの分布

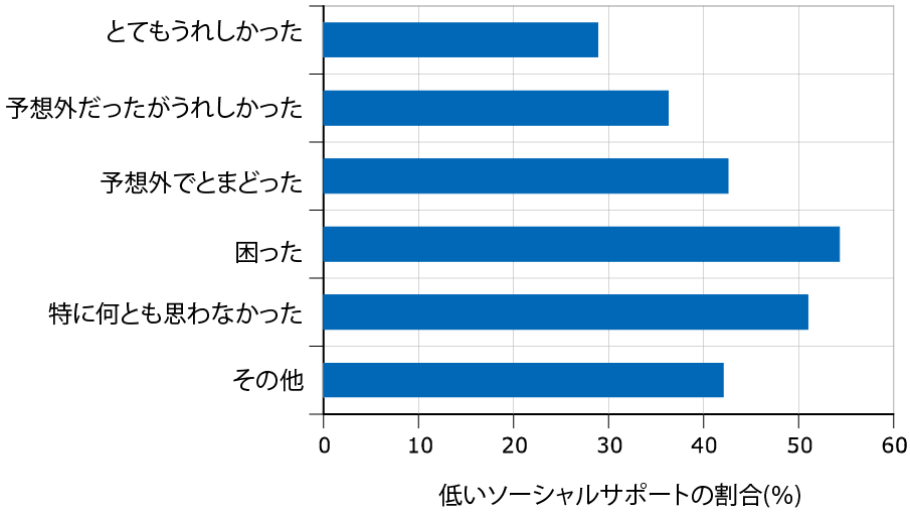

図２　妊娠判明時の母親の気持ち別の低いソーシャルサポートの割合

■ 研究結果

妊娠に対する気持ちは、妊娠前期ごろに配布した質問票にて情報収集し「とてもうれしかった」が 49,395 人（67.2%）と最も多く、次いで「予想外だったがうれしかった」が 17,899 人（24.3%）、「予想外でとまどった」が 4,704 人（6.4%）でした。そのほか、「困った」が 358 人（0.5%）、「特に何とも思わなかった」が 344 人（0.5%）、「その他」が 818 人（1.1%）でした（図１）。また、「とてもうれしかった」以外の気持ちを持つ母親は、ソーシャルサポートが低い傾向にありました（図２）。

次に、妊娠が判明した時点での気持ちと子どもの発達との関連を検討した結果、「とてもうれしかった」と回答した場合と比較して、それ以外の気持ちを持った母親の子どもでは、発達の遅れ疑いが多い(「ちょっと詳しく」参照)ことが明らかになりました。特に、「特に何とも思わなかった」と回答した母親の子どもにおいて、その関連が最も強く認められました（調整オッズ比 1.68、95%信頼区間 1.41-2.00）（図３）。

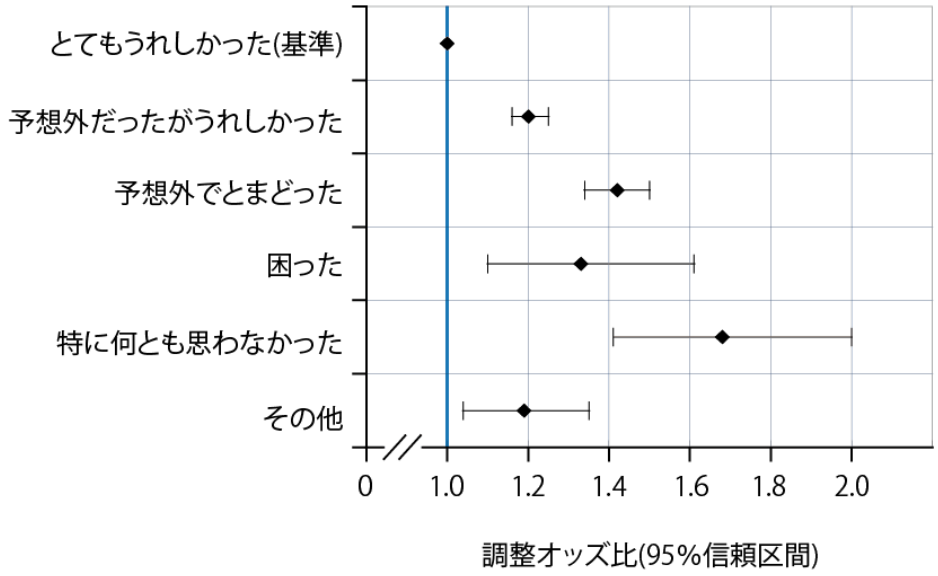

図３　妊娠判明時の気持ちと子どもの発達の遅れ疑いとの関連（調整オッズ比）

最後に、ソーシャルサポートについて検討したところ、妊娠が判明した時点での気持ちと子どもの発達との関連には、ソーシャルサポートが媒介しており、周囲からの支えがその関連をやわらげる方向に働くことが示唆されました。特に、「その他」と回答した母親でソーシャルサポートを介する部分の割合が最も大きく （45.0%)、次いで「困った」(43.0%)、「特に何とも思わなかった」(27.8%)の順でした。また、「予想外だったがうれしかった」(22.8%)や「予想外でとまどった」(22.2%) においても、ソーシャルサポートが関連の一部を担っていることが示されました （図４）。

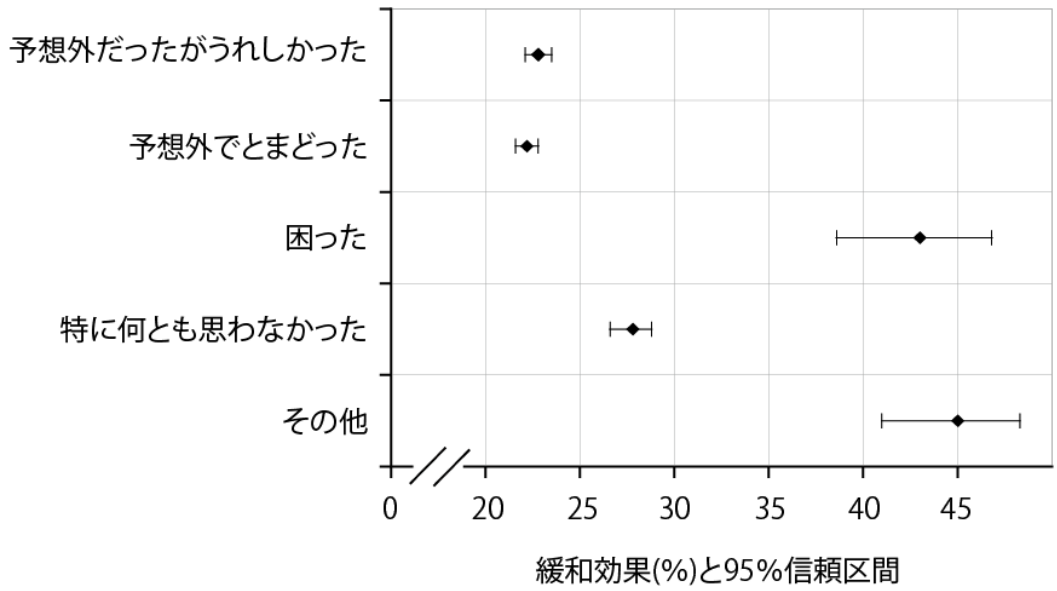

図 4　ソーシャルサポートによる緩和効果

本研究では、これまで妊娠の意図性と子どもの発達との関連で指摘されてきた知見と同様に、妊娠時の気持ちという指標でも、子どもの発達と関連することが確認されました。なかでも今回の検討では、「特に何とも思わなかった」と回答した群で最も高いリスクが認められました。

この結果は、明確なネガティブ感情だけでなく、無関心あるいは感情が顕在化していない状態にある母親も、支援の対象として留意すべきであることを示しています。「特に何とも思わなかった」という気持ちを表した母親は、子どもとの関わりが希薄になることで、子どもの自己認識や対人相互作用の機会に影響を及ぼすのかもしれません。一方で、ソーシャルサポートが高いと否定的あるいは無関心な感情を抱いていた場合でも、発達の遅れ疑いの発生が少なくなる関連が示されました。母親に対する社会的な支援は、母親自身のメンタルヘルスの改善を通じて、子どもの発達に好影響を及ぼす可能性が考えられます。

本研究で用いた「妊娠がわかったときの気持ち」は、母子健康手帳交付時の面接において確認されることが多く、母子保健の現場で広く収集されている情報です。本研究の結果は、この簡便な質問項目が、その後の子どもの発達に関わる重要な指標となりうることを示しています。これまでの研究において、妊娠に対する気持ちがネガティブである場合、妊婦健診の受診や健康行動が抑制され、支援につながりにくいことが指摘されています[3)]。本研究においても、妊娠がわかった時点での気持ちが子どもの発達と関連することから、妊婦健診の受診を促進するとともに、その機会を活用して育児期までつながる継続的な支援体制の構築が必要だと言えます。

本研究にはいくつかの限界があります。第一に、妊娠に対する気持ちは単一項目で評価されており、感情の多様性を十分に捉えられていない可能性があります。第二に、子どもの発達は保護者による自己報告に基づいているため、評価バイアスの影響が考えられます。また、本研究は妊婦健診や母子手帳交付の場でリクルートされた対象者を中心としており、選択バイアスの可能性があります。

今後は、妊娠がわかった時点での気持ちを手がかりに、支援が必要な対象を早期に把握するとともに、妊婦健診および出産後の定期健診を通じて、継続的かつ多面的なソーシャルサポートにつなげていくことが求められます。

1) Tokuda N, Kobayashi Y, Tanaka H et al. (2021) Feelings about pregnancy and mother–infant bonding as predictors of persistent psychological distress. *Journal of Psychiatric Research* 140: 132–140. https://doi.org/10.1016/j.jpsychires.2021.05.056
2) Delgado-Ron JA and Janus M (2023) Association between pregnancy planning or intention and early child development: A systematic scoping review. *PLOS Global Public Health* 3(12): e0002636. https://doi.org/10.1371/journal.pgph.0002636
3) Nagamine M, Matsumura K, Tsuchida A et al. (2023) Relationship between prenatal checkup status and low birth weight. *Annals of Epidemiology* 83: 8–14. https://doi.org/10.1016/j.annepidem.2023.04.008

ちょっと詳しく

ソーシャルサポート

社会的関係の中でやりとりされる支援のことで、健康行動の維持やストレッサーの影響を緩和する働きがあります。ソーシャルサポートはその内容によって、以下のように分けることができます。

情緒的サポート：共感や愛情の提供
情報的サポート：問題の解決に必要なアドバイスや情報の提供
道具的サポート：形のある物やサービスの提供
評価的サポート：肯定的な評価の提供

本研究では、「愛情や好意を示してくれる人がいるか」「相談や意思決定を支えてくれる人がいるか」「信頼できる人と連絡を取れているか」の 3 項目を用いてソーシャルサポートを評価しており、主に**情緒的サポートおよび情報的サポート**を反映する指標を用いました。

子どもの精神神経発達の評価尺度

子どもの精神神経発達は、Ages and Stages Questionnaire, Third Edition（ASQ-3）を用いて評価されました。発達指標の ASQ-3（Ages and Stages Questionnaire, Third Edition）とは、保護者の方がお子さんを観察して回答する質問票から得られる指標です。ASQ-3 は、コミュニケーション（話す、聞くなど）、粗大運動（立つ、歩くなど）、微細運動（指先で物をつかむなど）、問題解決（手順を考えて行動するなど）、個人・社会（他人とのやり取りに関する行動など）の 5 つの領域について各年齢時での発達の度合いを評価します。本研究では、何個の領域でカットオフ値を下回ったという合計得点を算出し、合計点が高いほど「発達の遅れ疑い 」の可能性が高いと判断しました。

【「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」とは】

子どもの健康と環境に関する全国調査（以下、「エコチル調査」）は、胎児期から小児期にかけての化学物質ばく露が子どもの健康に与える影響を明らかにするために、平成 22（2010）年度から全国で約 10 万組の親子を対象として環境省が開始した、大規模かつ長期にわたる出生コホート調査です。臍帯血、血液、尿、母乳、乳歯等の生体試料を採取し保存・分析するとともに、追跡調査を行い、子どもの健康と化学物質等の環境要因との関係を明らかにしています。

エコチル調査は、国立環境研究所に研究の中心機関としてコアセンターを、国立成育医療研究センターに医学的支援のためのメディカルサポートセンターを、また、日本の各地域で調査を行うために公募で選定された 15 の大学等に地域の調査の拠点となるユニットセンターを設置し、環境省と共に各関係機関が協働して実施しています。

● 環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」WEB サイト
http://www.env.go.jp/chemi/ceh/index.html

● 富山大学 エコチル調査 WEB サイト
http://www.med.u-toyama.ac.jp/eco-tuc/

【論文詳細】

論文名：

The mediating effect of social support on the relationship between negative feelings about pregnancy and child developmental delays: A nationwide birth cohort – the Japan Environment and Children's Study

著者：

永岑光恵 1,3・松村健太 2,3,4・酒井淳子 2,3・土田暁子 2,3・稲寺秀邦 2,3・JECS グループ 5

1 東京科学大学 リベラルアーツ研究教育院

2 富山大学 エコチル調査富山ユニットセンター

3 富山大学 医学部 公衆衛生学講座

4 青森県立保健大学 健康科学部 健康科学総合教育部門 疫学・精神栄養研究室

5 JECS グループ：エコチル調査運営委員長（研究代表者）、コアセンター長、メディカルサポートセンター代表、各ユニットセンターから構成

掲載誌：Journal of Health Psychology（2026 年 6 月 28 日オンライン先行掲載）

https://doi.org/10.1177/13591053261460707

【本発表資料のお問い合わせ先】
東京科学大学リベラルアーツ研究教育院　教授　永岑光恵
（富山大学医学部　公衆衛生学講座 協力研究員）
TEL:03-5734-3567(直通) Email:nagamine.mitsue@ila.isct.ac.jp

富山大学学術研究部医学系　公衆衛生学講座　名誉教授　稲寺秀邦
TEL:076-415-8842 Email:inadera@med.u-toyama.ac.jp
ウェブサイト：http://www.med.u-toyama.ac.jp/eco-tuc/

【本報道に関するお問い合わせ先】
富山大学 総務部 総務課 広報・基金室
TEL：076-445-6028　FAX：076-445-6063
Email：kouhou@u-toyama.ac.jp

東京科学大学 総務企画部 広報課
TEL: 03-5734-2975　FAX: 03-5734-3661
Email: media@adm.isct.ac.jp